

近代における遊興空間の「聖地性」

——甲子園の場合——

三 宅 香 織

はじめに

プロ野球・阪神タイガースの本拠地であり、また春と夏の高校野球の舞台である甲子園球場（兵庫県西宮市）は、1924（大正13）年8月1日の開場から80年超の時を経て、高校野球の「聖地」として球児らのあこがれを背負う存在であると同時に、タイガースファンからも「聖地」と呼ばれ、他の球場とは別格の存在として認識されるに至っている。

人々が、その場所を単なる「舞台」としてではなく、「聖地」すなわち「神聖視された地」と認識するためには、他の場所との絶対的な差違を決定づける物語による裏付けが必要となる。そして、この物語の生成過程には「内的要因」と「外的要因」という2つの力が作用している。甲子園球場における物語の生成においての「内的要因」とは、そこで行われる野球という競技そのものと、それが行われることによって起こったドラマを意味する。それに対して「外的要因」としては、甲子園球場という装置自体の持つ意味や、建てられた土地の持つ地理的な伝統や条件、及び意味といったものが考えられよう。

そうした物語を背負うことによって、「聖地」という語が醸し出すイメージはさらに増幅され、「聖地」は絶えずそこへ人を呼び続ける場所となり得る。人が集まることによって成り立つ「遊興空間」とっては、「聖地性」の存在は重要な意味を持っているといえる。

そこで本稿では、甲子園球場という近代の遊興空間が、いかなる論理によって「聖地性」を形成し得る条件を備えていたのかについて、上記の「外的要因」から探ることを試みたい。また、それに際しては、近世における代表的な遊興空間の一つである、興行地における「聖地性」形成の論理を手がかりとして利用することとする。スポーツ競技とは、競技する側の視線か

ら見た場合には、最終的に勝敗という結果を導くという点で芸能とは一線を画すが、見る側の視線に立ってみれば、一定の入場料を支払って享受するある種の見世物であるという点に、芸能興行との共通点を見いだすことができるからである。興行というものが、定められた料金を支払った観客のみを、ある一定の時間、一定の空間に囲い込み、それらの人々だけが共有できるものを提供することであるとするならば、スタジアムで行われるスポーツ競技も、興行の一種であると規定することが十分可能であろう。

なお、物語の生成における「内的要因」と「外的要因」は、常にそれぞれが独立して作用しているわけではなく、互いに絡まり合うことによって、新たな物語を生み出していくという要素も持っている。そのため、場合によっては「内的要因」にも言及する。

1. 興行地における「聖地性」形成の論理

では、遊興空間とは、今日までいかなる論理によって選定され、その地に形成されてきたのであろうか。小笠原恭子は、近代以前の遊興空間を代表するものである「興行地」について、中世から近世にかけての選定過程を以下のように分析する（小笠原、1992）。

それによると、都市形成に際しての「興行地」の特定空間への定着過程からは、都市構築の設計図を引いた「為政者の政治的意向」と、興行空間として選定された「土地の負う伝統」という二面が浮かび、江戸と京という二つの都市にそれぞれの典型が見られるという。京が首都にふさわしい土地として遷都されたのに対し、江戸はこの地が政権の中心となることが明らかとなった時点から、土地のもつ伝統ばかりか物理的な土地そのものまでを破壊するほどの大変革を敢行し、機能最優先の新構想による町づくりがなされた。

京において、中世の興行は寺社の勧進と結びついて展開してきたが、それは次第に河原や洛外の神社、街

道口など、何らかの点で異郷、冥府と境を接する「聖なる空間」に限定されていく。都市形成の論理の確立していた古代都市・京においては、興行は死との境界において冥府への入り口というイメージを現出させ、鎮魂を旨として行われた。中世の勤進興行の円形棧敷から近世の歌舞伎小屋へと受け継がれた、身を縮めて狭い木戸をくぐり抜けて入るという不自由な構造は、これを「くぐる」ことによって俗界との境界を越え、清められて異次元の世界に生まれ変わるというシンボリックな効果があったという。「聖空間」に入り得るのは贖罪の勤進札を所持したものだけに許されていたと考えられるのである。

そしてまた、これらの場所は原則として無主の地であったが、土地を基盤とした体制の確立を目指す近世においては、これを容認しては矛盾を残すことになる。徳川政権にとってはその根絶が体制確立への急務であり、このことが江戸の町づくりにあたって十分に考慮された。江戸は、京における鴨川の河原のような、無主の伝統を有する地を都市の中に含み込んでいなかったという点で近世都市の構築に有利であったといえるが、同時に「興行地」形成にあたって新しい発想を要することにもなったのである。

それが、次の3点であった。第1に、公許の場所は中世的伝統を負う地よりも、何ら背景のない新開地におかれるべきであること。第2に、町づくりの最中は中心部での興行を黙認し、のちに周縁部に代替地を与えることで体制に抱え込むこと。第3に、初めは遊里と一体化して殷賑を図るも、宣伝が行き渡ったのちには分離させて特定地に囲い込むこと。

こうした論理によって形成された江戸の興行地（芝居町）は、1661（寛文元）年に堺町、木挽町への特定化が完了したと考えられている。町の殷賑と町民定着のために中心部での興行を黙認していた幕府は、町づくりが進むにつれて、公許という権威のもと、興行権と土地を与える恩典と引き換えに芸能者を特定地に囲い込み、体制に組み込むことに成功した。明暦の大火（1657）後には、拡大する江戸市街の中央部となった吉原の遊里を浅草へ遠ざけ、それと前後して隣接する堺町に芝居の集中化が図られた。堺町が選定されたのは吉原に近く市街地のはずれであるという理由であろうが、代替地を得て芝居興行を許可された意味は大きいという。それは、無主の地としての伝統を有してきた芸能興行地の所有権を明確にすることを意味する。公許という形で興行開催を許可することは、興行認可の権限が幕府にあると確認することとなり、芸能者側

からいえば、土地および小屋の建築と所有を公許され、かつ興行を行う権限を認められたことになるからだ。

このように、中世には興行が行われる場所は異郷や冥府と接する「聖なる空間」であり、同時に無主の地であったが、近世には、前者は芝居小屋そのもののあり方として引き継がれ、後者は新興の近世都市における新開の公有地という形に変容。土地そのものの伝統としての聖域性や無主性が、為政者の意志によって創出されるものに形を変えたのである。

では具体的に、近世都市の中で興行地はどのような形で現出していたのか。これについては、服部幸雄による都市の中の芝居町論が的確な示唆を与えてくれる（服部、1986）。そこで服部は、近世都市、主に江戸における芝居町の特徴を「橋を渡っていざなわれる、水に囲まれた辺境の地の聖なる祝祭空間であり、近世都市庶民の猥雑な理想郷」であり、一つの「宇宙」とであると述べている。江戸の庶民にとって芝居町（興行地）は、吉原の遊里と並んで日常性を拒否する非日常的空間であって、倫理的には「悪」の世界であり、また、近世新興都市社会において成立した一大祝祭空間であった。

そこで注目されるのが、これらの空間がその周辺を水（海や川）によって区切られている点である。川、船、橋と芝居町（祝祭空間＝聖空間）との間には、切り離すことのできない紐帯があり、またそこには、「聖空間」は海に近く川と交差しあうという、日本人に伝統的な理想郷観が反映されている。当時としては、都心を離れた辺鄙の地であった江戸の芝居町、浅草・猿若町は、近接していた吉原の廓と同様に交通不便の地にあった。だが、辺境の地であるがゆえに、期待に胸をはずませて行く観客や遊客たちに、そのつど〈道行〉の時空を体験させる仕掛けを持つことになり、船を用いて彼岸に渡ろうとする〈道行〉によって、日常性からの離脱、非日常性への飛翔が確実に進行することになったのだ。

そしてもうひとつ重要なのは、橋を渡って芝居へ行くという都市の中における芝居町のあり方もまた、人を祝祭空間にいざなうために必要な仕掛けになっていたということである。服部はここで、上田篤の文章を引用して次のように論じる。上田によると、橋は端であり、すなわち一つの世界の周縁部であって中心部ではない、いわば辺界の無主番外地であるという。また、西洋や中国の橋が川を隔てた二つの世界をつなぐ連結器という意味を持つのに対して、日本の橋は二つ

の世界を分け隔てる境界、あるいは境界であることを示すシンボルであると指摘する。人は橋を渡ることによって、対岸の世界が日常とは次元の違う別世界であることを確認する。彼岸が確かに彼岸であり、それが非日常の空間であることを、橋を渡ることが確認させるのだというのである（上田、1984）。

近世における興行地が、都市の周縁に位置し、聖と俗をつなぐものとして水辺に存立していたという指摘は、吉見俊哉による近世の盛り場成立要因論の中にも見られる（吉見、1987）。そこでは要因として主に4点を挙げているが、その中で、興行地を含む江戸の盛り場は、聖俗両面をつなぐ要素として水辺に存立していたということを述べている。

吉見は江戸を代表する盛り場として両国を挙げ、両国が当初からたえず「死」と密接に結びついた空間であったということを説明する。享保期以降に両国名物となり、現代でも隅田川の夏の風物詩として残る花火は、度重なる大火の死者供養のために始められたものであり、両国・回向院で催される勤進相撲も鎮魂のパフォーマンスに端緒がある。そして、江戸の町人にとって両国橋を渡ることは、生者の国から死者の国へ足をふみ入れるに等しい行為だったという。両国は、当時の江戸においては東端であり、町の周縁であった。

江戸最大の盛り場両国において、「聖域性」と悪場所性と死は相互に不可分に結びつきながら盛り場という空間を形作る上での基本的な構成要素をなしていた。これらを吉見は〈異界〉と呼ぶ。〈異界〉とは、江戸の空間構成の外縁部にあってその秩序の限界を侵すものとして現れた諸々の混沌の力の表象であり、聖潔と表裏一体をなしている。〈異界〉は江戸の周縁に分布する両国、浅草、芝などの盛り場に伏在、江戸の盛り場は何より〈異界〉への窓としてあったのだという。これを踏まえるなら、江戸の盛り場の多くが水辺に接して形成されていたことの意味も明らかだ。江戸において水は、聖俗両面にわたる多様な要素から組み立てられる都市を構造化する上で重要な要素として作用していた。吉見の分析は、寺社地や盛り場といった宗教空間ないし遊興空間は市民の日常生活の場からは離れ、他界と結びつくイメージをもった場所を慎重に選びながら、市街地から奥まった丘陵の緑や水辺に寄りそって登場していたという、陣内秀信の言葉でまとめられている（陣内、1985）。

大阪の道頓堀などもそうであるように、江戸に限らず近世都市における興行地が多くの場合、河原や川岸の地に存在していたのは事実であった。そこは橋を渡

っていく辺界の地に違いなかったが、その土地に「あるべくして在った」のだといえよう。そしてまた、こうした近世の遊興空間形成の論理は、近代以降の遊興空間設置においても少なからぬ影響を与えていたと考えられる。その一例が、次に挙げる甲子園球場の建設である。

2. 甲子園経営地の開発と甲子園球場の建設

「阪神甲子園球場」（以下、甲子園球場）の名が、完成した1924（大正13）年の干支「甲子」にちなんでいることはよく知られているが、その建設用地は、阪神間を南北に流れる武庫川の2つの支流（枝川と申川）を廃川にして行われた武庫川改修工事の結果、新たに生まれた土地であった。たびたび氾濫する武庫川の改修は、兵庫県の手によって1920（同9）年8月に始まり、3年弱をかけて1923（同12）年3月によりやく完成する。こうして誕生した広大な土地を手に入れたのが、同地域内に路線を敷いていた阪神電鉄だった。阪神はすでに、1905（明治38）年に大阪・出入橋と神戸・三宮間で営業を開始していたが、現在の甲子園付近に駅はなかった。1951（昭和26）年に西宮市に編入されるまで武庫郡鳴尾村の一部であった同地周辺には、ほとんど住む人もいなかったからだ。

だが、同社の技師長で後に専務となった三崎省三は、早くから同地一帯に目をつけていた。明治の末に欧米を視察した三崎は「武庫川を改修して鳴尾に築港をなし、即ち武庫川をハドソン河、またはテムズ河にするのである。しかも、現今の枝川及び武庫川河畔は、住宅地にするのである。更に鳴尾より西宮の海岸を、遊覧地、即ちブリックプール及びブライトンまたはコニー・アイランドにするのである」というプランを持っていたという（阪神電気鉄道株式会社、1980）。阪神は1922（大正11）年10月30日に兵庫県と売買契約を締結。枝川・申川廃川敷地24万4596坪のうち、道路や水路敷地用の2万596坪を除いた22万4000坪を、410万円で買収した。これが後に、甲子園球場とその周辺施設、及び、住宅地として開発された「甲子園経営地」となる土地であった（図1）。

ここに野球場を建設することになった契機は、高校野球の前身である中等学校野球熱の高まりにあった。1915（大正4）年に大阪・豊中球場で第1回大会が行われた全国中等学校野球大会は、1917（同6）年の第3回大会から、枝川の河口東側にあった鳴尾競馬場内の鳴尾グラウンドで行われていた。ここでは、馬場の

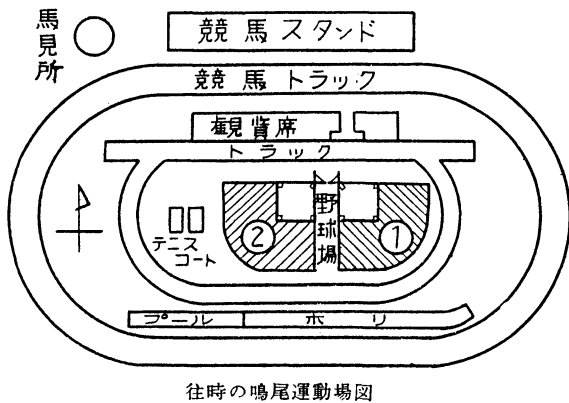


図2 鳴尾運動場（出典：「輸送奉仕の五十年」）

内側に2面の野球グラウンドをとっていたが、固定のスタンドはホームベース後方のみで、ほかは木造の移動スタンドを利用していた（図2）。だが、回を重ねるごとに観客が増加する中、常設スタンドを持つ本格的な野球場の建設が望まれていた。その用地として白羽の矢が立ったのが、枝川・申川廃川敷地だったわけだが、三崎は買収の時点ですでにこの建設を念頭に置いていたと考えられる。

前述した欧米視察以前、米国への留学経験も持っていた三崎は、現地でのスポーツ熱を目の当たりにし、いずれ日本でも本格的なスポーツグラウンドが必要になると感じており、1899（明治32）年に阪神に入社後も、常にスタジアム建設を思い描いていたという。同時に、当時の阪神が抱えていた事情もこれを後押しした。それは、阪急との競争である。阪急電鉄が、阪神間の山の手に大阪と神戸を結ぶ神戸線を開業したのが1920（大正9）年。これを機に、浜手に路線を持つ阪神との激しい旅客競争が始まった。阪急を率いる小林一三は、宝塚新温泉の開業や日本初の月賦による分譲住宅販売など、さまざまなアイデアをもって沿線開発にあたっていた。

「阪神電気鉄道八十年史」には、1924（大正13）年と翌25（同14）年の両社の業績比較が掲載されているが、阪神は本業の運輸収入では阪急を上回っていたが、土地経営その他の収入では逆に大きく水をあけられていた。同分野で阪急の2倍以上の投資をしていたにもかかわらず、土地家屋収入は阪急の28%程度にすぎず、加えて阪急には宝塚経営収入があった（表）。つまり、沿線開発関連の事業では、ライバルに大きく劣っていたのである。阪神にとって沿線開発は最大の課題となっていたはずで、その切り札として浮上したのが、三崎が長年あためてきた計画だった。枝川・申川廃川敷地の買収は、三崎に野球場の建設を決断さ

表 大正14年下期の阪神・阪急収入比較（円）

	乗客	電灯電力	土地経営 その他	（うち 土地家屋）	（うち 宝塚経営）
阪神	2,895,262	1,567,548	262,000	99,000	
阪急	2,745,240	1,051,944	1,432,000	348,000	588,000

「阪神電気鉄道八十年史」から作成

せた。買収契約締結3週間後の1922（同11）年11月20日、阪神は枝川・申川の分岐点下手にさらに1万4000坪の土地を買い足し、3万坪の用地が確保された。三崎はここに、日本初の大運動場を建設、さらにその周辺に日本版の海浜リゾートの開発を構想したのである。その中心的役割を与えられたもの、それこそが甲子園球場だった。

甲子園球場は、開場当初は野球専用のグラウンドではなかった。モデルとなったのは、阪神の社員が出張先の米国から設計書を持ち帰った、ニューヨークの「ポログラウンド」。大リーグ、ニューヨーク・ジャイアンツの本拠地ではあるが、その名の通りにポロ競技などにも利用可能な多目的グラウンドだ。これを参考に設計された甲子園球場も、1924（大正13）年8月1日の竣工当時は、外野グラウンドの部分に105×68メートルのサッカーコートがとれるようになっていた（翌年からはここで全国中等学校蹴球大会＝現在の全国高校ラグビーフットボール、および同サッカー選手権両大会の前身＝も開催されていた）。当初の名称は「甲子園大運動場」。この完成によって鳴尾グラウンドは閉鎖され、同年の第10回大会から全国中等学校野球大会が舞台をここに移す（8月13日開幕）。また翌1925（同14）年3月には、前年の第1回は名古屋で行われた春の選抜大会も甲子園で行われた。これによって高校野球（当時は中等学校野球）の2大会が甲子園にでそろった。以来80年間、戦争などによる中断はあるにせよ、甲子園は高校野球の舞台となり続けている。

中等学校野球の隆盛の中で、あっという間に阪神間の新名所としての地位を得た甲子園には、春夏の大会のたびに連日4万人を超す観衆が詰めかけた。内野スタンドに設けられた大鉄傘が日よけになると、女学生にも人気があったという。そこで、完成から5年後の1929（昭和4）年には、三塁側内野スタンドと外野との間にあった木造20段のスタンドを改造し、コンクリート50段の新スタンドを増設した。これが今も「アルプススタンド」と呼ばれる場所で、2年後の1931（同6）年にはここまで大鉄傘が増設されている。

そして、甲子園球場の2つの柱のうちのもう一方、タイガースが誕生したのは、開場から11年後の1935（昭和10）年12月10日のことだった。当時の正式名称は「大阪野球倶楽部大阪タイガース」。現在のプロ野球の前身である、日本職業野球連盟が結成されたのが、翌1936（同11）年2月5日。その日本プロ野球誕生の前年には、当時の米大リーグを代表するホームラン打者だったベーブ・ルースも甲子園のグラウンドに立っている。1934（同9）年11月2日、全米オールスターの一員として来日したルースは、11月24日と25日に甲子園で試合を行ったが、グラウンドを見るなりその広さに驚いたという逸話が残っている。当時の甲子園は、大リーグ選手をも驚かせる規模を誇っていたわけだ。

甲子園球場で最初のプロ野球の試合が行われたのは、1936（昭和11）年4月19日。タイガースは結成記念試合に連勝する好スタートを切ったが、入場者はわずかに4225人だったという。そして同年4月29日、甲子園で第1回日本職業野球リーグが開幕。これを嚆矢として、タイガースと甲子園の“蜜月”の歴史が始まったわけである。以後タイガースは、一貫して甲子園球場を本拠地としてきた。2005（平成17）年現在、プロ野球に参加している球団の中で、フランチャイズとする都市（地域）も、本拠地とする球場も、そのどちらもが一度も変更されていないのはタイガースだけで、こうしたところにも、甲子園が「聖地」と称される一端をうかがい知ることが可能であろう。

しかしながら、前述のように、阪神はこの地に野球場だけを建設しようとしていたわけではない。1926（大正15）年7月16日、それまで大会時だけ開設されていた阪神電鉄の甲子園駅が、常設駅に格上げされた。同日には、同駅と甲子園浜を結ぶ軌道線（路面電車）も開業。その前年夏には、すでに甲子園浜の海水浴場が開場していたが、これを機に、三崎の描いていた海浜リゾートの開発が本格的に動き出す。1929（昭和4）年5月26日、球場より海岸側に「甲子園南運動場」が開設された。1周500メートル、直線200メートルのトラックに観覧席もついた総合競技場で、フィールドは一面の芝生。1944（同19）年に閉鎖されるまで、それ以前は甲子園球場で行われていた陸上競技大会の舞台となっただけでなく、ラグビーやサッカーの正式競技場としての機能も備えており、全国中学校蹴球大会でも使用された。また、軌道線開通直前の1926（大正15）5月には、球場西側に30面のコートを持つ「甲子園庭球場」が開設。以後、年々増加す

るテニス人口に対応するために徐々にコートを増設していたが、1937（昭和12）年10月には、南運動場の南側に「甲子園国際庭球場」を新設。コートのほかに宿泊施設なども設けられ、デビスカップなどの国際試合も開催されている。さらに、1932（同7）年10月1日、球場の三塁側アルプススタンド下に日本水泳連盟公認の室内プールが、同じく一塁側には室内体育館が完成。1937（同12）年8月には、球場西側の旧庭球場跡地に「甲子園大プール」も開設されるなど、着々と一大運動拠点としての整備が進められていった（図3）。

そして、阪神がこれらの運動施設建設と並んで力を入れていたのが、1929（昭和4）年7月6日に開場した「甲子園娯楽場」だった。南運動場のさらに海岸よりに立地し、当初は潮湯や映画を上映する余興場などが主だったが、1932（同7）年に「阪神パーク」と改称すると、動物園や遊戯施設を増強。1935（同10）年にはパーク内の海岸沿いの場所に水族館が開設され、ゴンドウクジラを日本で初めて遊泳させて話題になったという。これが、多分にライバル阪急の宝塚での事業を意識していたことは想像に難くない。阪急にない阪神の強み、その最大要素が「海」であった。海を利用した娯楽施設の整備は、阪急への強力な対抗策として期待されていたであろう。それが力の入れ方になって表れていた。

一方、阪神が甲子園経営地で住宅地の開発を始めたのは、1928（昭和3）年。1924（大正13）年の球場開

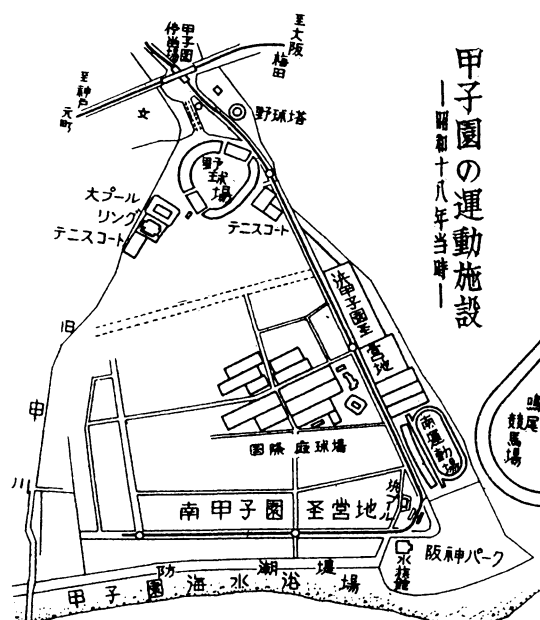


図3 甲子園の運動施設—昭和18年当時—
(出典:「輸送奉仕の五十年」)

場から4年後のことだった。第1回の分譲地となったのは、甲子園駅北側から国道2号にかけての中甲子園地区。さらに2年後の1930（昭和5）年には、中甲子園と国道より北側の上甲子園で第2回分譲を行っている。これらの地域では、主に敷地規模を大きくとった宅地分譲が展開された。このころ作成されたパンフレットによると、同地域について、自然豊かで交通利便な「健康地」というイメージと、多様な娯楽施設が充実した「リゾート」というイメージが訴えられているという（角野，2000）。「健康地」というイメージは、明治末年から阪神が沿線で進めてきた借家事業でも強調されてきたことでもあった。阪神は1908（明治41）年に『市外居住のすすめ』を刊行しているが、そこでは、大阪長谷川病院院長の長谷川清治が、大阪市内に比べて阪神間が「空気は固より清新で、土質も海浜は砂白く水清く山の手は砂又は赤土で飲料水も多く善良である」と、医者立場から郊外に住むことがいかに健康によいかを説いている（鈴木，1999）。これに加えて甲子園の場合には、周囲に多数存在する施設を通じて、運動による「健康地」というイメージが加算された。甲子園駅より南側の地域では、その一部が大林組に土地経営が委託されたが、そこに造成された宅地群には「浜甲子園健康住宅地」という名が付けられ、より一層「健康」のイメージが強く付与された。つまり、この地域全体の開発にとって、甲子園球場とその周辺施設が生み出すイメージは非常に重要だったといえよう（図4）。

ただし、こうした甲子園経営地での阪神の一連の開発について、橋爪紳也は「野球場を核としたアジア有数のスポーツ施設集積と集客施設群を想定、一方で通勤客を想定した郊外住宅地を建設するという判断だった」と説明する（永井・橋爪，2003）。橋爪はほかに、同様に野球場を中心にした町づくりとして大阪鉄道（現在の近畿日本鉄道）による「藤井寺花苑都市」（大阪府，中心施設は藤井寺球場）といった例を挙げるが、藤井寺が「野球場のある住宅地」を目指して野球場と住宅地開発がうまく調和するように想定されたのに対し、甲子園の場合、特に開発初期の段階では、集客施設の充実の方に強い力が働いていたようだ。それもまた、阪急との対抗意識が強く働いた結果だろう。住宅地としての付加価値を生み出す上でも、甲子園球場をはじめとする諸施設の存在や、その持つイメージは重要であったし、同時に、沿線の旅客を増加させるためにもそれだけ重要であった。

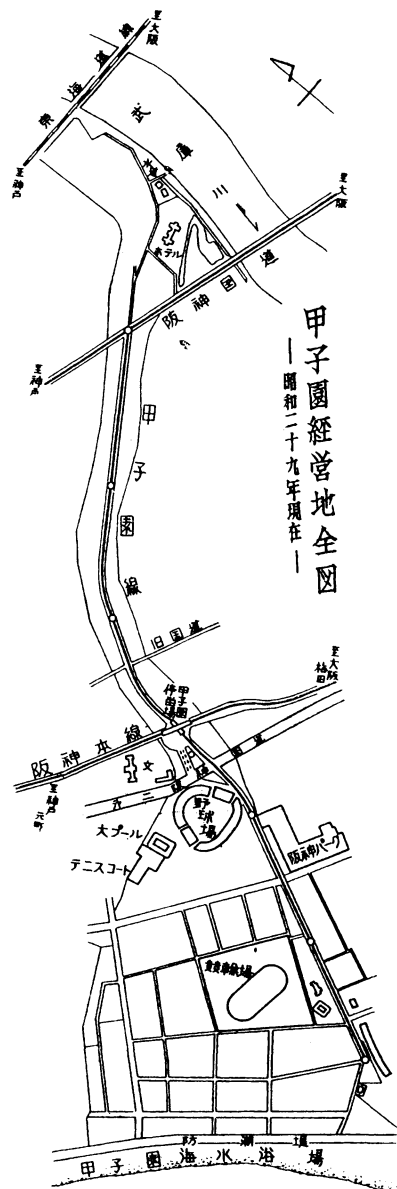


図4 甲子園経営地全図—昭和29年現在—
（出典：『輸送奉仕の五十年』）

3. 甲子園における「聖地性」形成の論理

以上のような経緯で建設、開発された、甲子園球場及びその周辺地域。この地に形成された近代の「遊興空間」が持つ色合いと、近世の遊興地が持っていた「聖地性」を比較していくと、そこからはいくつかの共通点が浮かび上がってくる。

第1は、この土地が持つ伝統という点である。前述のようにこの地域は、武庫川流域の河川改修によって生まれた新しい土地であった。その誕生経緯は、近世初頭に堀割の開削に伴って生まれた大阪の興行地「道頓堀」に酷似している。道頓堀の場合は、町づくりの

過程で新しく生まれた、決まった主を持たない土地に、「公許」という形で興行街としての開発に江戸幕府の「お墨付き」が与えられたことが以後の発展の契機となった。甲子園の場合も、もともとは川底や河川敷であった土地が基本的に「無主」であったことに違いなく、さらに明治維新によって生まれた新しい権威である「県」が、払い下げという形で民間（＝阪神）に開発許可を与えている。これは小笠原のいう「公許の場所は伝統を負う地よりも、何ら背景のない新開地におかれるべきであること」にピッタリと当てはまる。

また、現在では阪神間に連なる広域な市街地の中に埋没している同地あたりも、大正の末という時期には、大阪と神戸という都市の間で、それぞれの市街地からは離れた場所であった。そして何より、大阪方面から甲子園を目指すときは、必ず「橋」を渡らなければならなかった。多くの人にとってその橋は、阪神電車で渡る「鉄橋」であり、それは、鉄道という近代の新しいメディアを使って行われる〈道行〉の一部に組み込まれた仕掛けであったといえる。大阪から電車に乗り、武庫川にかかる鉄橋を越えると、甲子園の大鉄傘が見えてくる。上田がいうように「橋を渡ることが、対岸の世界が日常とは次元の違う別世界であることを確認させる」のだとすれば、甲子園を訪れる人にとっては、武庫川を渡るという行為が一種の「儀式」となって、日常から非日常へと足を踏み入れることを確認していることになる。同時にそれは、近世の人々が当時最大の遊興空間であった芝居町へ足を踏み入れるときに抱いていた思いを踏襲することでもある。江戸においては浅草・猿若町へ、大坂においては道頓堀の芝居町へ向かうとき、人々は必ずその手前にある橋を渡ることによって、日常の空間から非日常の世界へといざなわれた。それと同じ仕掛けが、近代の遊興空間である甲子園への道程にも組み込まれていたということだ。

そして、ここでは「海」の存在も重要であっただろう。海とはすなわち水辺である。近世の遊興空間は「市街地から奥まった丘陵の緑や水辺に寄りそって登場していた」わけだから、水辺は重要なファクターだ。当然ながら、川もまた水辺である。同地一帯は川と海によって周辺を区切られた存在であり、これもまた服部がいう「聖空間は海に近く、川と交差しあう」という、日本人の伝統的な理想郷観にピッタリと当てはまっている。

では、果たしてこれらがすべて偶然の産物なのかといえば、そうとは言い切れない部分がある。甲子園経

営地の払い下げや開発が決まる前から、阪神の三崎省三がこの地域に海浜リゾートの開発を思い描いていたことは前述した通りだ。三崎が、近世以来の伝統的な遊興空間に対するイメージを認識していたとする記録はないが、少なくとも三崎は、ニューヨークのコニー・アイランドや英国の海浜リゾートを念頭においていたわけであるから、「水辺」であることへの意識が強く働いていたことは間違いのないところだ。

また、これは三崎だけに限らず、阪急の小林一三による宝塚の開発にも共通していることだが、鉄道という新しいメディアを近代的な〈道行〉として、遊興空間へのいざないの手段にうまく取り入れている点も見逃せない。それは、旅客の獲得という経営者として視点から生じたものではあるが、単純な旅客獲得だけならば、それが必ずしも遊興空間である必然性はない。多くの鉄道経営者が小林に習った結果として、日本では各地の私鉄が同じような経営戦略をとったが、そのすべてが成功を収めたわけでもない。これらの点を鑑みるに、三崎は阪神が路線を敷いていた地域の特性を的確に見極め、その中での武庫川河口流域という地域に、最もふさわしい事業を当てはめたといえるのではないだろうか。それが今日に至るまで、甲子園球場に多くの人を集め続けていることの礎となったのだとすれば、そこには必然と偶然の相まった形で、近世から近代に受け継がれた遊興空間の「聖地性」の存在が、大きく影響していることは否定できない事実だろう。

4. 「聖地性」の継承の検討と今後の課題

ここまで見てきたように、甲子園球場及びその周辺地域では、開発当初の時点において、必然と偶然の両面から、近世の興行地における「聖地性」形成の論理が踏襲されていたことが明らかになってきた。しかし、開発時に形成された「聖地性」だけで、80年にわたって、常に人を集め続けることは不可能だ。つまり、当初に形成された「聖地性」をいかに継承してきたのか、という点についても検討を加える必要があるだろう。

それについて考えるとき、菊幸一による「物的文化装置としての甲子園スタジアム」論が、有益な示唆を与えてくれる（江刺・小椋編，1994）。菊は、記号学的な発想から甲子園から送られるメッセージの分析を試みるが、そこでは甲子園を現代の祝祭空間としての「物的装置」と位置づけ、それを3つの点に分けて論じている。

そこでは、中等学校野球の舞台が豊中から鳴尾を経て甲子園へと移ってきた過程の中に、観客動員数の増加と見世物としての野球の舞台装置をあらかじめ意識した戦略の存在を明示する。それは、単に具体的な設備の問題だけではなく、「アルプススタンド」という命名によって、人工的な物的装置があたかも自然物として認識され、結果としてフィールド・スポーツとしてのメタファーを伝達しているということや、建設当初から外壁に植えられたツタや、1928（昭和3）年から翌年にかけて本格的に植え付けられた芝生が、訪れるものに自然のメタファーを感じさせ、その記号的意味が伝統の重みとともに強化され、今日なお一層のレトリックを生み出す契機を与えていると論じる。これらは、長い年月を経てきたことが、当初に与えられた意味以上の作用を起こしたことを教えてくれる。

そして、立地条件の推移から郊外型球場としての甲子園の意味を、物的文化装置としてのシンボル強化の条件と意味空間の広がりから解釈するという視点によって、時間の推移に伴う意味の変化が導かれる。先に述べたように、建設時においては大阪と神戸のどちらの市街地からも外れた場所であり、郊外型の立地条件を有していた甲子園は、戦後の都市化の波の中で市街化区域に位置するようになり、現在では完全に都市型空間に移行したが、これによって、都市生活空間、都市型圏域のシンボルとしての甲子園が、これまで以上にその象徴性を高め、さまざまな意味解釈の場を提供していく条件を有することになるという。

また菊は、甲子園が立つ「阪神間」という独特な地理的条件と、その醸し出す風土にも注目する。甲子園をはじめとして、この地域の地名によく見られる「園」には、「住」と「遊」が近接した楽園のイメージが込められており、住宅地に近接した娯楽施設や温泉、運動施設などのすべてが、「遊び」のある「住空間」にはかせない要素であったという。三崎省三の言葉にもあったように、それこそが、まさに甲子園経営地の開発当初から意図されていたことでもあるわけだが、ここでの甲子園球場や周辺の施設群は、日常の生活と非日常の遊びとを出来る限り接近させ、それをつなぐ物的装置として機能することになるという。そして、阪神間の独特の風土を、多田道太郎の言葉を借りて以下のように説明する。即ち、山と海にはさまれた地形にあって、大阪と神戸の文化にはさまれた「あわい」に広がっていることで、この「あわい」の空間には、たとえば川をまたぐ橋上駅に代表されるような、合理主義ではわりきれない「なごみ」が存在して

いるといい、そこから菊は、甲子園球場が廃河川敷に立っていることや、阪神甲子園駅が廃川となった枝川跡をまたぐ橋上駅であったことが、この地域の「なごみ」を生み出しているのかもしれないとも述べている（多田・河内ほか編、1993）。

阪神間の風土に関する詳しい考察は別稿に譲るが、「住」と「遊」の融合をめざした甲子園という空間も、この地であったからこそ成り立ち得たという指摘は、今後さらに検討を進めていく上での、非常に重要な示唆を含んでいるだろう。加えて、今日の甲子園野球を祝祭空間としての物的文化装置＝スタジアムにフレーム化されたプレイのパフォーマンス体系として規定し、いかに儀礼化されているのかという意味解釈からは、舞台装置としての甲子園に施された仕掛けの意味と、そうした装置を備えた甲子園という場所が、近世の芝居町に通じるような、祝祭空間として認識されていることが明らかになる。これは、物語の生成における「内的要因」と「外的要因」の絡まり合いの例としても興味深い。

21世紀に入って、かつては庶民の娯楽の王様とまで評された野球も、その地位は危うくなっている。その背景としては、娯楽の多様化や、衛星放送の普及に伴う海外スポーツの流入などが言われているが、野球場に足を運ぶ人は減少し、巨人戦を中心としたテレビ視聴率の落ち込みは深刻だ。また、その過程においては、日本の野球界の内部構造に対する批判も噴出している。だが、そうした逆風の中でも、甲子園球場を本拠地とするタイガースは、着実に観客動員数を伸ばしている。そして、その要因について論じられるときに、必ず俎上にのぼるのが「甲子園」という場所の持つ力についてである。

本稿で行ってきた「聖地性」の検討によって、そうした力の一端は明らかになったと思われる。その一方で、今回はほとんど触れることができなかった「内的要因」、つまり、甲子園という装置の中で演じられてきた、野球という競技を通じて生まれたドラマが与えた影響については、さらなる検討が必要であろう。また、阪神間という土地が持つ独特の風土についての分析という、新たな課題も浮上した。今後は、こうした点を踏まえながら、本稿での検討を足がかりとして、「甲子園」、さらには近代の「遊興空間」が形成し、継承してきた「聖地性」というものに、アプローチしていきたいと思う。

引用・参考文献

- 石井紳三編，1990，『グラウンドのはなし』技報堂出版
- 上田 篤，1984，『橋と日本人』岩波書店
- ，2003，『都市と日本人』岩波書店
- 江刺正吾・小椋 博編，1994，『高校野球の社会学』世界思想社
- 小笠原恭子，1992，『都市と劇場』平凡社
- 角野幸博，2000，『郊外の20世紀 テーマを追い求めた住宅地』学芸出版社
- 多田道太郎・河内厚郎ほか編，1993，『阪神観「間」の文化快楽』東方出版
- 玉置通夫，2004，『甲子園球場物語』文藝春秋
- 陣内秀信，1985，『東京の空間人類学』筑摩書房
- 鈴木博之，1999，『都市へ 日本の近代10』中央公論新社
- 永井良和・橋爪紳也，2003，『南海ホークスがあったところ 野球ファンとパ・リーグの文化史』紀伊國屋書店
- 西宮市役所，1967，『西宮市史 第3巻』
- 服部幸雄，1986，『大いなる小屋』平凡社
- 阪神電気鉄道株式会社，1955，『輸送奉仕の五十年』
- ，1985，『阪神電気鉄道八十年史』
- 阪神タイガース，1991，『阪神タイガース昭和のあゆみ（プロ野球前史）』
- ベースボールマガジン社，2005，『球場物語』
- 守屋毅編，1989，『日本人と遊び 現代日本文化における伝統と変容6』ドメス出版
- 松尾順一，2003，『高校野球の観方を変えよう』現代図書
- 吉見俊哉，1987，『都市のドラマトゥルギーー ー東京・盛り場の社会史ー』弘文堂